論文内容要旨

論文題名：「在日中国人の出産・育児環境と医療者に対するニーズに関する研究」

所属領域：基礎・臨床・統合医療領域

氏名：昭和大学大学院保健医療学研究科　博士前期課程　川上　慧美

内容要旨

背景：平成29年在日中国人は70万人を超え、今後日本で出産・育児を経験する在日中国人がさらに増加することが考えられる。

目的：在日中国人夫婦が日本で出産・育児期を経験し、医療関係者と関わる上で感じた周産期看護に対するニーズを明らかにすることを目的とした。

方法：研究デザインは質的記述的研究である。スノーボールサンプリング法にて選定された在日中国人夫婦10組に半構造的面接を実施し、逐語録を作成した。その後、カテゴリー化し、分娩期、産後入院期、1か月までの3つの時期において分析を行った。研究期間は2018年7月から12月であり、昭和大学保健医療学部倫理委員会の承認を受け実施した（第441号）。

結果：在日中国人夫婦が感じた周産期医療のニーズを3つの時期において分析した結果、分娩期の医療者に対するニーズは、30コード、サブカテゴリー23、11つのカテゴリーで構成されていた。ニーズに関する主軸の要素は、『分娩時の環境づくり』『継続してほしい充実したケア』、『現状に対する課題』『分娩時の要望』『夫婦の相違』の5つであった。産後入院期の医療者に対するニーズでは、29コード、サブカテゴリー26、10つのカテゴリーで構成されていた。ニーズに関する主軸の要素は、『文化を配慮した環境づくり』『継続してほしい充実したケア』『現状に対する課題』『産後の要望』『夫婦の相違』の5つであった。退院後1か月の医療者に対するニーズは、22コード、サブカテゴリー13、6つのカテゴリーで構成されていた。ニーズに関する主軸の要素は、『現状に対する課題』『産後のサポートに関する要望』『文化を配慮した関わり』の3つであった。3つ時期の概念で共通にみられたものは主軸の『現状に対する課題』であり、説明の不足や不十分なケアが存在した。分娩期と産後入院期で主軸の『夫婦の相違』存在したが1か月ではなかった。さらに、文化的な主軸では、入院期で出現し退院後1か月には、『新たな中国と日本の文化』へと変化していった。

考察：『現状に対する課題』が3つの時期に共通されていたことは、出産は非日常であり、育児も大変不安が多く、異国でなくともストレスフルな状態にある。言語的な問題により、指導等で充実した援助を提供されなかったことが考えられる。さらに、『夫婦の相違』が1か月まで存在しないことは、夫婦・家族で育児を行うことで、互いの育児内容や役割が把握できるようになったことが考えられた。また、文化的な主軸は、中国と日本の文化の狭間で試行錯誤しながら育児を行っていたにも関わらず、退院後は実父母や義父母の中国の文化的育児観との間で、新たな混乱が生じていることが示唆された。よって、医療者は、夫婦の育児に対する思いを尊重しながら、実父母・義父母の家族も対象に、退院後の混乱の軽減に努める必要がある。

結語：在日中国人夫婦は、言語だけでなく、2つの文化の狭間で試行錯誤しながら、育児を行っていた。医療者は祖国の文化を考慮し、妊娠中から家族への指導や充実した説明が必要である。